

平成20年度 郷土資料館特別展

「ジョセフ・ヒコ」

播磨町で生まれた「新聞の父」ジョセフ・ヒコが
1858年にアメリカの市民権を得てから、今年で150周年となります。

⑪ 「海の男たち」

ジョセフ・ヒコがアメリカの市民権を取得した1858年に、姫路藩で一隻の洋式帆船が進水しました。



▲大きな願いが込められた船の進水式資料 (室津賀茂神社蔵)

【ヒコ・クイズ】 1858年に姫路藩で進水した様式帆船の名は何でしょう。

- ① 栄力丸
- ② 速鳥丸
- ③ 咸臨丸

1858年8月4日(安政5年6月25日)に、姫路藩の室津池の浜で、一隻の洋式帆船が進水しました。船の名は「速鳥丸」といいます。長さ27呎、幅5.4呎、わずかに67トンの船ですが、姫路藩にとって、画期的な船でした。

洋式帆船は、大型船建造禁止令が解かれた1853年以降、盛んに造られていきます。理由は、逆風や外洋での能力が優れているためで、幕府や薩摩藩はオランダの技術などをもとに、ペリー来航の翌年の1855年には、「鳳凰丸」や「昇平丸」を完成させます。

姫路藩でも開国とともに、西洋文化を学ぶ機会を探している人がいました。そのような1854年に、栄力丸で漂流していた清太郎たちが長崎に帰ってきました。その後、姫路藩に帰り、落ち着いた翌年の夏、清太郎たち4人に姫路藩の学校である好古堂の教授秋吉安民から誘いの手紙がきます。話は洋式帆船の商船建造へと進み、親しく姫路藩に出入りができるように名字帯刀が許されます。なお、この商船建造は、当時、軍艦建造が多い中、注目すべき決定といわれています。

「海の男たち」4人は、さすがに船の構造をしつかりと記憶に留めていて、正確な図面を描いて指示したと言われています。

途中、木村甚八は亡くなりますが、1858年夏、進水式を迎え、船の名は『播磨国風土記』に出てくる「速鳥丸」と名づけられました。ジョセフ・ヒコが、もしその場にいたなら、将来、このような商船を持つたいと願ったことでしょう。彼も海の男として、海外貿易を夢見た一人でした。

(郷土資料館 田井恭一)



● クイズの答 ●
② 速鳥丸

【問い合わせ】 郷土資料館 ☎079 (435) 5000

絵ものがたり『ジョセフ・ヒコと洋式帆船の男たち』(播磨町ふるさとの先覚者顕彰会) 発売中2,500円



町の人口 1月1日現在 (住民基本台帳人口+外国籍人口)

34,252人 (-14人)	男...16,810人 (+6人)	世帯数...13,380 (+9)
	女...17,442人 (-20人)	